

『新エロイーズ』についての考察

——ルソーの孤独と解放——

鈴木 球子

キーワード：18世紀フランス ルソー 『新エロイーズ』

はじめに

ルソーはその生涯において、多くの文章を表した。1761年から1762年にかけての時期はとりわけ、今日彼の主著と呼ばれる作品が次々と刊行された時期である。『社会契約論』（1762）はフランス革命や近代民主主義を支える基本理論となった。その1年前には、近代教育論の書として名高い『エミール、または教育について』が出版されている。

この2冊に先立って1761年に出版された『ジュリあるいは新エロイーズ』は、ジュネーヴ湖畔を背景に貴族の娘ジュリと家庭教師サン＝ブルーの恋を描き、大きな評判を呼んだ。文学史においては、この書簡体小説はもっぱらロマン主義文学の先駆的作品として位置づけられ、その系譜はゲーテの『若きウェルテルの悩み』やセナンクールの『オーベルマン』、シャトー・ブリアンの『ルネ』や『アドルフ』に受け継がれていくとされる。

上記のような作品の解説は、個々の作品を文学史上、あるいは政治思想・教育論史上に位置づけるものである。ところで、一見異なる主題を扱っているように見えるこれらの作品に通底するものは存在するのだろうか？ また、作品同士の呼応関係を追っていくことで、ルソーの思考の変遷と、エクリチュールの変化をとらえることは可能だろうか？

本論では、とりわけ『新エロイーズ』に注目をし、この恋愛小説が同一作者の手による他のテキスト（政治的言説や教育的言説）と、どのように関連しているのかを考察する。そして、この作品がルソーにおいて、ある転換点になっていることを明らかにする。ルソーの著すものが、初期と晩年とでは方向性が異なっていることは、これまでにもしばしば指摘されてきたことである。『新エロイーズ』を中心に、テキスト同士の関係を明らかにし、また作品内や作品間の矛盾点に注目することで、ルソーの思考の変化の過程を明らかにしていく。

1. 『新エロイーズ』と『エミール』

1750年のディジョン・アカデミーの課題「学問と芸術の復興は習俗の純化に寄与したのか」に対して、学問芸術の発達と美德の衰退を関連付けることで否定的に答えた論文『学問芸術論』は、ルソーの名を一躍知識人たちの間に知らしめた。その後、彼は『人間不平等起原論』（1755）、『演劇におけるダランベール氏への手紙』（1758）を發表し、さらに『ジュリあるいは新エロイズ』（1761）と『社会契約論』（1762）、『エミール』（1762）を非常に短い間に続けざまに出版した。

ルソーの政治哲学論と教育論の間には、明らかな呼応関係が存在する。『学問芸術論』にはすでに、のちの代表作に発展する文明批判の萌芽が見られる。『人間不平等起原論』は、不平等がほとんど存在しない原始の「自然状態」が存在すると述べる。人間が複雑化した社会関係を築くようになり、富の蓄積や所有権の主張が行われると、人々の間に争いや不平等が生じる。自然状態に留まれなくなった人間は、各人の身体と財産を保護し、自由と平等を最大限確保するための方法を見出す必要性に迫られる。この方法こそが「社会契約」である。言い換えれば、「神のもとの平等」を約束する「神」と「人間」との契約に代わって、「国家」あるいは「社会」と「個人」の間に契約が交わされるのである。

「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる¹⁾」という一行から始まる『エミール』は、『学問芸術論』や『人間不平等起原論』の命題を受け継ぎ、人間の文明化・社会化の過程と、人間の成長の過程とを重ね合わせて論じる。人間の「子供期」「青年期」という区分が、ここでは前提とされている。エミールの「子供期」は、原始の自然状態と呼応しており、彼は「まったく素朴な自然のうちに²⁾」ひたすら善良であるように育てられる。だが、青年期に差し掛かると、彼は社会に出る準備をしなければならない。エミールの師である「わたし」は、「社会契約はあらゆる市民社会の基礎になっている」と述べる。「わたし」はエミールに「有徳」であり、理性を身につけ、祖国（国家）への愛と義務を学ぶように促す。

『新エロイズ』はこれらの政治的・教育的言説に前後を挟まれて執筆された。この小説は書簡体で記され、ジュリとサン＝プルーの恋物語を扱う第一部から第三部までが前半部分にあたる。ジュリは恋を諦め、父親の要求に従って、父の友人である年上のヴォルマールと結婚をする。ヴォルマールは妻子とともに、農園クラランに理想の家族共同体を作り上げる。後半の第四部から第六部では、傷心の世界一周の旅から帰国したサン＝プルーがクラランに招かれ、過去の恋を清算していく様が描かれる。2人の間に蘇りかける情念は、美德の力によって克服されるかに思える。だが、事はそれほど単純ではない。

ヴォルマールと結婚する前のジュリは、エミールの配偶者ソフィのような理想的な女性ではない。むしろ、彼女とサン＝プルーの情熱は『エミール』においては、否定されるべきものであった。エミールがソフィに恋をし、情念を感じ始めたころ、彼の師は次のように説いて、恋人同士を一旦引き離す。

有徳な人間とはどういう人か。それは自分の愛情を克服できる人だ。そうすれば、その人は自分の理性に、良心に従うことになるからだ。その人は自分の義務をはたし、正しい秩序のうちに留まって、なにもものもかれをそこから逸脱させることはできない³。

一方、サン＝プルーとジュリは自分の愛情を克服することができない。サン＝プルーは第一の書簡からすでに「わたくしの方でも理性を取り戻すため、あるいは心に芽生えの感じられる乱れを心の奥深く隠すために、あらゆる努力をすることをお誓いします」とジュリに書き送っている。彼は恋のために理性を失っていることを自覚しており、「わたしの理性にお与えになった損害⁴」に対して、ジュリに賠償を求めさえする。

二人の間で交わされる書簡は時に、駆け引きめいたものになる。ジュリは旅行中の恋人に、なぜパリの女性について一言も話してくれないのかと問いかける。「もしやあなたは世界で最も魅力のある婦人たちを描いてみせるとわたくしを不安にしはしないかと心配していらっしゃるのかしら？　ねえ、それはお間違いですわよ⁵。」このように述べておきながら、彼女は自分に2人の求婚者があったことを同じ手紙で告げる。だが、彼らの人物像を「背が高く臆病なお馬鹿さん」「こんな2人の手合い⁶」として、かなり辛らつに描いて見せたうえで、サン＝プルーを安心させもするのだ。これに対してサン＝プルーは、「あなたご自身のために、早く追い払っておしまいなさい⁷」と返信をする。

『新エロイズ』は、決して精神的な恋の物語というだけではない。サン＝プルーは「あなたの心とあなたをわが物とすること」のうちのどちらかを選ぶとしたら、ためらわず前者を択るといいながらも、肉体的欲望を抱いていることを恋人に告げる。「あなたはわたしたちの官能を魅了なさるだけで、あなたがあなたの官能とお戦いになることはない⁸」というのが、女性であるジュリに対する恨み言である。彼はまた、「あなたがあんなに巧みに隠していらっしゃる神秘についてわたしがこれほどよく心得ていますのをお知りになってもお驚きにならないでください」と述べ、リュリのオペラ『アルミード』の Aria に託して、恋人の肉体的魅力について言及しさえする。

彼女の熟しきらぬ固い乳房が垣間見られる。

ひた隠す衣服がその大方を見せまいとしても甲斐はない。

恋の欲情は眼よりも鋭くあらゆる邪魔を突き破る⁹。

『新エロイズ』の執筆期のルソーに影響を与えた同時代の作家としてしばしば、アベ・プレヴォーと、『クラリッサ・ハーロー』で有名なサミュエル・リチャードソンの名が挙げられる¹⁰。だがそれだけではなく、同時代のクレビヨン・フィスが『夜とひととき』などの作品で描いた、男女の駆け引きの応酬と同じ感覚が、『新エロイズ』にも漂っているのを否定することはできない。ミシェル・ドゥロンは『プティット・メゾン¹¹』でも、貴族の愛の誘惑の際に、リュリの同じオペラの一節が引用されていることを指摘する¹²。つまり『新エロイズ』は、フランス革命前のリベルタン文学

の雰囲気をも、幾分か纏っているのである。

ジュリのもとを離れ、パリを訪れたサン＝プルーは社交界に足を踏み入れる。そこで彼は「人間観察」に専心する。「わたしの目的は人間を知ることでありまして、わたしの方法は人間をその種々様々の関係の中で研究することです¹³」と彼はジュリに書き送る。この台詞は『人間不平等起原』本論の冒頭で「私が語らなければならないのは人間についてである¹⁴」と述べた、ルソーの姿勢を感じさせるものである。サン＝プルーはジュリの求めに応じて、手紙の中でパリの女性たちの姿を描いてみせるが、それによると彼女たちは外面的には流行を追い、蓮っ葉で狡猾、手練手管に長けているが、内部には「良識と理性と人間愛と善良な天性」を隠しているとされる。彼は大都市の頹廃を感じ取りつつ、それでも人間の本性の善性に目を向けようとする。だが、「わたしの中で人間の本性が墮落していくのを感じ¹⁵」つつあったサン＝プルーは、だまされて酒を過ごし、官能的欲望に負けて、見知らぬ女性と一夜を過ごすことになる。リベルタン小説的駆け引きは、真面目な若者の墮落へと繋がっているのだ。サン＝プルーの「人間観察」は、こうして失敗に終わる。社交界にデビューしたばかりの若者が手練れの女性や先輩に導かれて社交界のルールを身に着けていく様を描いた、同時代のルーヴェの『フォーブラ』やクレビヨンの『心と精神の迷い』との類似性、さらに19世紀小説が好んで描いた青年像（『ゴリオ爺さん』のラスティニャックや『感情教育』のフレデリック）の祖型が、ここに認められる。

ヴォルマールとの結婚によって、ジュリは「回心」する。結婚式の日には彼女は教会で、それまでに味わったことのない不思議な感銘を受け、美德に忠実であろうと心を決める。「甘美な、心を慰める美德よ、わたくしはそなたのために新たな生を生きるのです¹⁶」と彼女は誓いを立てる。彼女は夫を愛し、貞節でいたいと思うが、それは家庭を結び、あらゆる社会を結ぶ第一の義務だからである。こうして、彼女は「家庭と社会」という、自らが属する共同体の一員としての自覚を持つようになる。そして、パリ社交界から遠く離れたクラランの地で、夫とともに有徳に生きようと努める。

クラランでジュリが子供たちに施す教育は、1年後に『エミール』において述べられる教育論と極めて似通っている。ヴォルマール夫妻に招かれたサン＝プルーは、彼らのやり方にひどく驚かされる。子供たちは年ごろ相応に元気で無鉄砲でありながら、大層大人しい。ジュリは子どもたちに指図も禁止もせず、ただ傍らにいるばかりで、一見彼らに無頓着なようだが、実はその振る舞いには様々な心遣いが隠されている。サン＝プルーはジュリに、「子供の教育が始まらねばならない時は生まれた時からです（略）たとえ何も教えることがおありにならないにせよ、あなたに服従することは教えてあげなければなりませんまい¹⁷」と忠告をするが、それに対して彼女は以下のように答える。

明智を誇るあらゆる両親に共通の間違ひは、自分の子が生まれた時からすでに道理の弁えがあると想定し、話すこともできないうちからもう大人に向かって言うように子供たちに言うことです。（略）大人になる前は、子供は子供であるように自然は命じています。（略）幼年期には幼年期特有の見方や考え方、感じ方があるので

す¹⁸。

ジュリは子供が子供のままであるように、言い換えれば「自然状態」を抜け出して悪徳を身に着けないように、常に気を配っている。周囲の大人が子供の「気がきいた言動」を誉めそやす時、彼女は子供を大人の道化人形のように扱うことを厳しく批判する。また、子供自身の要求についても、時にきっぱりと撥ねつける。

ところが間もなくわたくしは、子供というものは言う通りにしてくれることを自分の権利にして、ほぼ生れた時から自然状態を脱するようになることを知りました(略)。拒まれる辛さを減らしてやるために、わたくしはまず息子を拒まれることに順応させましたが、しかも長いこと厭な気持ちにさせたり、悲嘆や反抗心を起こさせないように、何事でも一度び拒めば決して取消すことができないようにしました¹⁹。

エミールの教師も同様に、子供の口からたまに洩れる「気のきいた言葉」をもって、子供を大人扱いすることに疑義を抱いている。また、彼は『だめ』と叫ぶと、この言葉は鉄の扉であって²⁰ 欲しいと述べ、子供の要求に対して毅然と拒否することで、「忍耐強く、むらがなく、あきらめのいい、落ち着いた子供」にすると述べる。ジュリの息子たちは、まさにこの子供像に相当していると言えるだろう。彼女はのちに『エミール』において実践される教育を、先取りして行っており、それはヴォルマールの指図に従うものである。クラランで行われている全てのことに、この主人の意志が反映されている

ジュリの幼い息子には、エミールにソフィが与えられるように、従姉妹であり相談相手のクレールの娘アンリエットが配偶者として、すでに予定されている。ジュリは、かつて父親に婚約者を定められたことに対して己が抗ったのを、まったく忘れておりようである。『エミール』は若い二人が結ばれるまでの物語であるが、2つの小説の間のこうした繋がりには、おそらくエミールとソフィの暮らしはクラランのそれ(有徳のヴォルマールと社会と家庭への義務に目覚めたジュリの生活)に近いものであろうと推察させる。いったい『新エロイーズ』は、贖罪と許しの物語なのだろうか? あるいは『エミール』で描かれる理想への橋渡しであり、18世紀の貴族社会の頹廢を批判し、近代道徳と家族意識の誕生へと至る過程として、考えればよいのだろうか? 『エミール』において理想的な教育を受けた生徒が、『社会契約論』が描く「社会・国家」を支える有徳な構成員/市民となり、『新エロイーズ』は『エミール』に至るまでの過渡期であるといった解釈をここでするのは実にたやすいが、それは安易に過ぎることだろう。

2. クラランとヴォルマール

クラランとは、一体どのような場所なのだろうか? ジュリと再会し、ヴォルマー

ルにも受け入れられたサン＝ブルーは、この領地の素晴らしさについて、恩人エドワード卿に書き送っている。そこでは富と贅沢を匂わせるものは全て撤去され、簡素で便利なものばかりが置かれ、一切の物は快く、感じがよくて、豊かさと礼儀正しさを表していると述べられる。

どの部屋も田舎にいる気がしないような部屋はなく、しかも都会のあらゆる便利の見つからない部屋はありません²¹。

サン＝ブルーがヴァレーの素朴な生活を体験し、対比的にパリの頹廢が語られた後であるだけに一層、この記述は貴重である。田舎と都会は対立するものとして描かれるが、クラランは田舎の純朴さと、田舎では実際には得られない便利さの双方を備えた、ある意味「都合の好い」場所である。

クラランが、決して平等な社会ではないことは、すでに多くの研究者によって指摘されている。確かにそこには「上流社会と称せられる無為徒食の群は滅多に見られ²²」ない。だが、「クラランは不平等な身分社会である。それは『[人間] 不平等 [起原] 論』の暗く鋭い分析が明らかにした不幸な『社会』の条件をけっして払拭してはいない²³」と松本勤は語る。

ヴォルマールがデタンジュ男爵（ジュリの父）の恩人であること、そしてサン＝ブルーが平民の出であることが、男爵をして前者を後者より娘にふさわしいと思わせる理由である。言い換えれば、ヴォルマールとジュリとの結婚は、初めから身分の差による不平等を前提とし、平民出身のサン＝ブルーの犠牲の上に成り立っているものである。サン＝ブルーの人柄については、彼が娘の結婚を脅かすものでなくなるやいなや、男爵にとって好ましいものになる。つまり、男爵がサン＝ブルーを非難したのは、その出自のせいだけであったことが、以下の引用文には示されている。サン＝ブルーはここで「偏見 (préjugés)」という言葉を用いている。

しかしながらあの方 [=男爵] の偏見の奇妙さは不思議です。わたしが一門になり得ないということを確認なすって以来、どんな名誉でもわたしにお与えにならぬことはありません²⁴。

クラランには、3種類の召使がいる。主人たちの身の周りの奉仕をする家内の召使、中庭の使用人、そして日雇労働者である。召使同士は愛情によって結びつき、それは「和合 (concorde)」という語をもって表されている。サン＝ブルーは「その愛情は彼らのすべてが主人に対して抱いている愛情から生じたものであり、主人に対する愛情に従属するものなのです²⁵」として、クラランの主従関係に感嘆する。彼はまたその関係を「親子」にも例えている。「言わば、彼ら [召使たち] はただ父母を変えただけなのです。もっと富裕な父母を得たというだけなのです²⁶。」

だが、クラランの営みはサン＝ブルーが描いてみせるほど、単純なものではない。日雇労働者を監視するのは、中庭の召使の仕事である。ヴォルマール夫妻は1日に数

回も見回り、領土全体の収入に対する歩合を与えたり、勤勉な者に賞与を与えたりすることによって、彼らを巧みに働かせる。ヴォルマールの有する耕地のうち、もっともよい収穫を挙げているのはブドウ畑である。ブドウの収穫日はサン＝プルーによって、人々が幸せに浸りながら仕事に勤しむという、大層美しい情景として描かれている。「すべての人々はこの上なく親密に暮し、あらゆる人々は平等でありながら、しかも礼を失する者は一人もいないのです²⁷。」

ブドウ畑に建てられた小屋では、貴族は百姓と一緒に雨宿りをし、百姓たちと同じスープを飲むと彼は述べる。

わたしたちは彼ら〔＝百姓たち〕の内気な態度や田舎者風の挨拶を傲然と冷笑するような真似はせず、彼らを気楽にさせるために自然な態度でそれに応じます（略）。彼らはそういうことに対して敏感なのでして、わたしたちが彼らのために本来の身分から下がるのを見て、それだけ一そう彼らは進んで彼らの身分から一步も出ようとはしないのです²⁸。

結局、クラランの平等は見せかけだけのものである。サン＝プルーは、「彼らは進んで彼らの身分から出ようとしなさい」と述べ、百姓たちの遠慮を自発的なものと見なそうとする。だが一方で、「誰かが己の分際を忘れるようなことがあれば（略）翌日に容赦なく暇を出される²⁹（傍点は論者）」ことが明らかになる。つまり平等とは、解雇する権利を持つ主人の側からのみ提示されるものであり、召使がそれを鵜呑みにすることは、己の身過ぎを失うことに繋がるのだ。そして平民であるサン＝プルーはここで百姓たちの態度を「冷笑するような真似はしない」と述べているが、それは逆説的な上下関係を感じさせる。また「私たち（on）」と「彼ら（ils）」という言葉を使っており、彼の立場は少なくとも百姓側ではない。

サン＝プルーのこうした夢見がちな賛美は、「エリゼ（地上の楽園）」と呼ばれる庭を訪れた際にも、発揮されている。それは密生した葉叢に取り囲まれている快適な空間である。花々が咲き、水が流れ、数知れぬ鳥の声が聞こえる庭に足を踏み入れたサン＝プルーは、そこに自然界の中でもっとも未開で、最も寂しい場所を見る思いがする。しかしジュリは、エリゼが彼女自身の手によって作られたもの、つまり人工的な庭であることを告げる。水は噴水から引かれたものであり、鳥は環境を整え、餌になる穀物を周囲に植えることで、おびよせられたのである。エリゼは秩序立てられた共同体であるクラランの、いわば雛形である。サン＝プルーは、エリゼが社会的・人工的な秩序がすっかり排除された場所であることを期待するが、そこに見られるのは決して「ありのままの自然」ではない。クラランは『人間不平等起原説』が示す「不平等の存在しない自然状態」を表しているのではなく、人間が作り上げた共同体における「自然の模倣」であり、「偽りの平等」が強いられる空間なのである。

クラランを支配するのは、主人ヴォルマールである。彼は非常に理性的であり、秩

序に対して生来の愛を抱いている。クラランにあるすべての者、すべての人間は、彼が整える秩序の中に組み込まれている。彼の支配は、召使たちの扱い方に見られるように、決して暴力的なものではなく、むしろ極めて巧妙に隠されている。彼に唯一欠けているものは信仰心であり、このことがジュリをひどく悩ませる。

サン＝プルーがクラランを訪れた最初の日に、ヴォルマールは彼に2つの選択肢を与える。それは、ジュリと差し向かいでヴォルマールがあたかも目の前にいるように暮らすか、あるいはヴォルマールの前であたかも彼がいないように暮らすか、というものである。主人はどちらでも都合の好い方を「自由に (librement)」選ぶようにいうが、選択内容を決定しているのはヴォルマール自身であり、言い換えればサン＝プルーには「どちらかを選ぶ自由」しか認められていないことになる。前者は、ヴォルマールが不在でも常に彼の視線を意識することであり、自身の中に自分の行動の監視者を置くことである。後者は実際に監視者を目の前にして、彼に強いられたのではないように行動することであり、この2つの選択肢のいずれを選ぼうとも、サン＝プルーはヴォルマールの法の下に置かれることになるのだ。

ジュリは夫がかつての恋人をクラランに招くのを見て、不安に駆られている。彼女はヴォルマールを打ち明け話の相手にし、サン＝プルーと差し向かいになれば必ず報告をし、手紙は全て夫に見せて、自身の潔白を明らかなものにしておこうと試みる。従姉妹宛ての手紙の中で、「わたしは手紙を書く毎にあたかも夫がそれを見てはならないかのように書いて、それから夫にそれを見せるという風にするのを義務としました³⁰」とジュリは告白する。この言葉には夫に対する恐れが見え隠れしており、夫を明白な「監視者」として位置づけようとしている。しかしヴォルマールは彼女の企みを看破し、「あなたがわたしに知らせては困ると思うようなことをあなた方の間で語ったことは決してないにせよ、そういうことを語らないのを掟にすることは慎むがよい³¹」と妻に告げ、あくまで自分の表立った監視者たる立場を否定して、彼女の手紙を見ようとはしない。

だが、ヴォルマールは一方で、ジュリが娘時代にサン＝プルーと交わした書簡の全てをひそかに入手していたことが、この後明らかになる。彼は彼らに試練を課し、あえて2人を残して、クラランを数日間留守にする。そして、元恋人と差し向かいにされることを避けようとする妻に、かつての愛の証拠を突きつけ、その上で貞節であることを望むと言っておくのである。

わたしは妻がその心から貞節であることを望むのであって、偶然のお陰で貞節であることを望むのではないのだから、誓いを守ってくれるだけでは満足しないのです³²。

ここに見られるのは、妻の心の支配である。このようにヴォルマールが居住者に課す「秩序」とは、彼らが「己の意志」で自分の法に従うことを欲し、他方では自分が権力者であることを認めないものである。クラランは愛と平和によって、超コード化された共同体である。コードを設定するのはヴォルマールであるが、美德と見せかけ

の平等とが、そのことを覆い隠している。

3. 孤独と解放

ジュリはクラランにあって、愛する者たちに囲まれ、一見完全に幸福なようである。彼女はエドワード卿とともにクラランを離れたサン＝ブルーと、7年ぶりに書簡をやりとりする。一通目の冒頭で、彼女は「美德の勝利」を語り、彼に対する「友情」を強調する。そして、彼に未亡人であるクレールとの結婚を進めるのだが、その表立った理由は「あなたがわたくしたちの心の中で占めていらっしゃるのと同じ地位をわたくしたちの家庭の中であなたにお与えする³³」ことである。そこには一種の「危険」を回避する気持ちが含まれている。そして、続く書簡では、彼女は自分の幸福な様子を披露しつつも死を予感し、ついには本音を吐露する。

わたくしは神様がこの世でわたくしに至福をお送りくださったことを思いつつ、わたくしのまわりを（略）、お父様、夫、子供たち、従姉妹、エドワード卿、あなたが取巻いているのを見ました。（略）わたくしは愛する者のすべての中に同時に生きていて、幸福と生とに満ち足りている。ああ死よ、いつでも好きな時に来るがいい³⁴！

どこを見ましても満足の種ばかりですのに、わたくしは満足していません。ひそかなもの憂さが心の奥に忍び込んできております。（略）あなた、わたくしは幸福すぎるのです、幸福がわたくしを倦怠させているのです³⁵。

この「倦怠させる (ennuyer)」という言葉は、同時代の『カンディードまたは最善説』を想起させるものである。「倦怠 (ennui)」は秩序立った古典主義時代の価値観から抜け出す際の、18世紀の重要な概念の1つである。ヴォルテールのこの小説において、天真爛漫な主人公は師のパングロスが唱える最善説「すべては最善の状態にある」を無邪気に信じるが、キュネゴンド嬢に恋をしたために、故郷を追われ世間の荒波にもまれることになる。幾多の困難を経て、彼は師や哲学者、容姿の衰えたキュネゴンド嬢や召使の老婆たちと一緒に小さな農地に落ち着く。農地での暮らしは彼らには退屈に思え、哲学者は「人間は不安による痙攣か、さもなければ倦怠 (ennui) の無気力状態の中で生きるように生まれついた³⁶」のだと考える。しかしカンディードは、わずか20アルパンの小さな農地で、豊かな暮らしを送る善良な老人に出会い、労働によって3つの不幸（退屈と不品行と貧乏）から遠ざけられることを教えられる。「ぼくたちの庭を耕さなければならない」というのが、主人公がたどり着いた結論である。彼と仲間たちが住む農地では各人は自分にできる仕事を行い、クラランを彷彿とさせる「小さな共同体」を形成する。だが、彼らは幸せなのだろうか？ ドゥロンは「主人公 [=カンディード] とその仲間たちが、クラランの失敗を免れるには、どんな方法でも最終的な幸福を確立することはできないと理解しさえすればよい³⁷」と述べる。

ジュリのいう「幸福 (bonheur)」とは何だろうか？ ロベール・モージは『18世紀における幸福の観念』の中で、18世紀になって「幸福」を巡るディスクールが急増し、とりわけ「個人的幸福 (bonheur individuel)」に重きが置かれるようになったことを指摘した。「個人的幸福と集団的幸福の矛盾は、より抽象的な形でも表され、『自然 (Nature)』と『美德 (Vertu)』の二律背反に変わる³⁸」と彼は言う。ジュリを悩ませる幸福は后者であり、クラランの秩序立てられた有徳な生活を指している。彼女は死の直前に、それまで抑えてきたサン＝ブルーへの恋心を告白する。「美德は地上でこそわたくしたちを隔てましたけれど、永遠の住み家ではわたくしたちを結び合せてくれましょ³⁹」という言葉は、クラランを支える美德が世俗の人間社会におけるルールでしかないことを示している。倦怠を訴えた時に、彼女は「幸福すぎる (je suis trop heureuse)」という表現を用いたが、彼女の最後の台詞でもまったく同じ表現 (trop heureuse) が使われている。だが、それはもはや集団的幸福を指すものではなく、罪にならずにサン＝ブルーを愛する権利を贖うために命を引き換えにすることへの喜びである。

ジュリの死は何を意味しているのだろうか？ 直接的な原因としては、彼女は池に落ちた息子を助けようとして溺れる。理性と秩序を愛するのみであったヴォルマールは、彼女の死をきっかけに宗教に目覚めるものと予想される。『クラリッサ・ハーロー』の敬虔なヒロインの死が悪人ラヴレースを回心させたように、ジュリの死は夫を回心させ、宗教愛に目覚めさせるために払われる犠牲なのだろうか？ ジュネーヴ出身のルソーは、「ローマのキリスト教 (カトリック)」については批判的な口調で語るが、「福音書のキリスト教 (プロテスタント)」については至高にして真なる宗教と認めている。ジュリは熱心なプロテスタントである。『エミール』でルソーは「理性だけで美德を確立しようとしてもだめだ⁴⁰」と述べ、美德を支える基盤として信仰の存在を説いている（「信仰なしにいかなる美德も存在しない⁴¹」）。では『新エロイズ』は「理性による美德への志向」から、『エミール』が語るような「宗教的感情に支えられた美德への愛」への移行を示唆するものなのだろうか？

若い2人の幸福を予感させる『エミール』の結末はしかし、ルソー自身の手によって破壊される。カトリック教会を否定した『エミール』は、パリ高等法院によって禁書に指定され、著者にも逮捕状が出た。その処分を受けてルソーはスイスのヌーシャテル地方に亡命し、そこで『エミール』の続編の執筆に励む。『エミールとソフィ、または孤独に生きる人たち』と題されたこの続編は未完に終わり、著者の生前に刊行されることはなかった。

『エミールとソフィ』では、師が彼らの元を去ってから、2人を襲った不幸が描かれている。エミールはいまや二児の父であるが、彼の娘が亡くなったことが冒頭で語られる。悲しみに沈む夫婦は、師が大都会について警告したことを思い出し、不吉な予感に慄きながらも、パリへと出ていく。そこで彼らは社交界の誘惑にさらされ、その生活はすっかり墮落したものになる。エミールはソフィ以外の女性に快樂を求め、ソフィは他の男との間に子供を身ごもる。エミールは葛藤の末、ソフィのもとを離れて職人として働き始め、続いて放浪をするが、だまされて奴隷として売り飛ばされて

しまう。

『新エロイーズ』と、『エミール』から『エミールとソフィ』への変化が抱えている矛盾は非常に重要である。エミールは師である「わたし」の教育の甲斐あって、美德に満ちた幸せな家庭生活を送るはずに思えた。だが彼は社交界の悪徳に染まり、その結果家族は分散する。『新エロイーズ』では、サン＝プルーは頹廢したパリから脱出し、クラランで心の平和を見出すように思われるが、美德の樂園はヒロインの死と告白によって崩壊する。クラランの描写に『人間不平等起原説』の内容を対比させて考えるならば、人工的に平等状態を作り出し、自然を模すこと自体に欺瞞があるのだとも考えられる。ジュリの最後の手紙は宗教的熱情を表しているが、同時に共同体全体の幸福のために設置されたコードからの脱却をも示している。

晩年のルソーは、人間社会から次第に遠ざかっていくようである。『孤独な散歩者の夢想』(1778)は「こうしてわたしは地上でたったひとりになってしまった⁴²」という告白文で始まる。彼は自分が「人間仲間」から追放されたのだと語り、「すべてのものから離れたわたしは一体何者か⁴³」という疑問を追求する。つまり、『告白』(1770)で始めた自己探求を、彼はさらに推し進めていくのである。『人間不平等起原論』で「人間」について語ろうとし、『新エロイーズ』でサン＝プルーに人間社会の観察を行わせたルソーの興味は、次第に己の内面へと向かっていく。

『孤独な散歩者の夢想』の「第五の散歩」で、ルソーはサン＝ピエール島での暮らしを追憶し、そこで「生涯で一番幸福な時」を過ごしたと回顧していることは、有名である。ロベール・モージは18世紀の幸福の様々な定義を分類し、とりわけ4つの代表的な相(1:意識の諸状態の総決算(bilan d'états de conscience)、2:総合、統一の形をとる幸福(bonheur sous la forme d'une totalité, d'une unité)、3:総括や一般性を拒絶する幸福(bonheur repousse toute idée de synthèse et d'université)、4:意識の鋭敏さや感情の高揚に結びつく幸福(bonheur liée à l'acuité de la conscience et à l'exaltation des sentiments))を紹介する⁴⁴。この第3の例として挙げられているのが、サン＝ピエール島におけるルソーの「純粹に植物的な[=無為な]意識」であり、のちに「自我(le moi)」と呼ばれるであろう、魂の最奥のもっとも秘められたもの、に存在の全てを集中させることで得られる幸福である。

自我の探求はいうまでもなく、デカルト以来の近代文学・哲学の非常に重要な課題である。それは今日にまで尾を引き、自己に拘泥する現代人をも生み出した。『告白』においてルソーは徹底して自分の内面を描き続け、文章を人々の前で朗読する。『孤独な散歩者の夢想』はその付録として書かれたものであるが、筆者の精神状態は『告白』執筆時よりも穏やかであるように感じられる。「第二の散歩」でルソーは、メニルモンタンの下り道にあって、四輪馬車の先にたって疾走してきた大きなデンマーク犬とぶつかり、意識を失う。

この〔意識を回復した後の〕最初の感覚は甘美な瞬間だった。まだそんなことで自分を感じるだけだった。わたしはこの瞬間、生に生まれつつあった。(略)すべては現在にあって、なにも思い出せない。わたしというものはっきりとした観念

は全然なく、自身に起こった先ほどのこともまったく意識にない。自分がだれであるかも、どこにいるのかもわからない。(略)わたしは自分の全存在のうちうっとりとするような静けさを感じていたが、それを思い出すたびにいつも、どんなに強烈な快樂の経験のうちにもそれにくらべられるものがないような気がする⁴⁵。

先ほどの「わたしは一体何者か」という問いに対して、この「自分が誰であるかわからない」というのは、重要な告白である。ルソーはこの瞬間に、初めて独立した自分という観念を無くした状態を経験している。それは長くは続かなかったが、彼の心にこの上ない平穩をもたらし、その後も度々思い出されるものとなっている。

ルソーはその生涯を通じて、『学問芸術論』から『エミールとソフィ』に至るまで、「人間」を追い続けた。『人間不平等起原論』は、人間社会における不平等の原因を論じ、『社会契約論』は、自然状態に留まれなくなった人間が、自由と平等を最大限に確保するためになすべきことを示している。ところで、ルソーは『新エロイーズ』において、社会と人間の有機的関係の限界と崩壊を描き出す。クラランは小さいながらに共同体（つまり社会の一形態）である。そこで模倣される自然（エリゼ）は、決して原始の自然状態の平等に人間を引き戻すものではない。また、秩序だった美德の園における幸福はジュリを最終的に救うことはできない。感情と欲望の逆りは、美德によって制御しきれものではない。エミールは自然状態において育てられ、やがて理性と美德を身に着けて、社会的義務を果たす人間へと成長する。だがルソーはエミールとソフィを墮落させ、自ら作り上げたこの社会的人間の理想像を自らの手で壊してしまうのだ。孤独者として歩むことを決意したルソーは、サン＝ピエール島における社会から隔たった暮らしに「退屈することはない (*sans m'y ennuyer*)⁴⁶」と語っているが、これはジュリが「倦怠 (*ennui*)」を覚えていたことと対照的である。人間社会に倦み疲れた彼はそこで、社会の絆から解放された人間の内面、つまり己の純然たる意識に目を向ける。だが、それだけではなく、一時ではあるが自我すらからも解放され、初めて平穩を得ることができたのである。

注

¹ Jean-Jacque Rousseau, *Émile ou de l'éducation* (1762), « Livre I », *Collection complète des œuvres de J. J. Rousseau*, Tome 4, 1782, p.1.

² *Ibid.*, « Livre V », p.376.

³ *Ibid.*

⁴ Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse* (1761), Première partie, « Lettre XII », A. Houssiaux, 1852-1853, p.26.

⁵ *Ibid.*, Deuxième Partie, « Lettre XVIII », p.130.

⁶ *Ibid.*

⁷ *Ibid.*, « Lettre XIX », p.132.

⁸ *Ibid.*, Première Partie, « Lettre X », p.24.

-
- ⁹ *Ibid.*, p.39. 『新エロイーズ (一)』, 安土正夫訳, 岩波文庫, p.133.
- ¹⁰ 井上櫻子, 「II 作品世界への招待 『新エロイーズ』 - パトスの解放を志向する『貞淑』な女性の物語-」, 『ルソーを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2010, p.103.
- ¹¹ ジャン＝フランソワ・ド・バスティードの小説。「プティット・メゾン」とは、貴族が逢引のために利用する別宅を指す。放蕩者として浮名を流すトレミクール侯爵は、貞淑なメリットをパリ郊外の別宅に招待して誘惑をする。
- ¹² Michel Delon, *Le principe de délicatesse*, Albin Michel, 2011, p.25.
- ¹³ Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, Deuxième Partie, « Lettre XVI », *op. cit.*, p.120.
- ¹⁴ Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 1755, p.223.
- ¹⁵ Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, Deuxième Partie, « Lettre XVII », *op. cit.*, p.127.
- ¹⁶ *Ibid.*, Toisième Partie, « Lettre XVIII », p.178.
- ¹⁷ *Ibid.*, Cinquième Partie, « Lettre III », p.284.
- ¹⁸ *Ibid.*, pp.284-285.
- ¹⁹ *Ibid.*, pp.289-290.
- ²⁰ Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, « Livre II », *op. cit.*, p.112.
- ²¹ Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, « Lettre X », *op. cit.*, p.223.
- ²² *Ibid.*, Cinquième Partie, « Lettre II », p.280.
- ²³ 松本勤, 「ルソーの転期: 『新エロイーズ』のクラランと『エミール』第五編における幸福な生活のイメージについて」『京都大学学術情報リポジトリ紅』Francia, 1962, p.12.
- ²⁴ Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, « Lettre VII », *op. cit.*, p.307.
- ²⁵ *Ibid.*, Quatrième Partie, « Lettre X », p.234.
- ²⁶ *Ibid.*, p.225.
- ²⁷ *Ibid.*, Cinquième Partie, « Lettre VII », p.307.
- ²⁸ *Ibid.*
- ²⁹ *Ibid.*, p.308.
- ³⁰ *Ibid.*, Quatrième Partie, « Lettre VII », p.217.
- ³¹ *Ibid.*
- ³² *Ibid.*, p.252.
- ³³ *Ibid.*, Sixième Partie, « Lettre VI », p.340.
- ³⁴ *Ibid.*, p.350.
- ³⁵ *Ibid.*, p.352.
- ³⁶ Voltaire, *Candide ou l'Optimisme* (1759), Chez Lefèbvre, Libraire, 1829, p.358.
- ³⁷ Michel Delon, *Le principe de délicatesse*, *op. cit.*, p.168.
- ³⁸ Robert Mauzi, *L'idée du bonheur dans la littérature et la pensée française*, Colin, 1979, Slatkine Reprints, p.145.
- ³⁹ Jean-Jacques Rousseau, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, Sixième partie, « Lettre XII », *op. cit.*, p.377.
- ⁴⁰ Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, « Livre IV », Tome 5, *op. cit.*, p.64.
- ⁴¹ *Ibid.*, p.107.
- ⁴² Jean-Jacques Rousseau, *Les Rêveries du promeneur solitaire* (1778), Collection complète des œuvres de J. J. Rousseau, Tome 10, 1782, p.369.
- ⁴³ *Ibid.*
- ⁴⁴ Robert Mauzi, *L'idée du bonheur dans la littérature et la pensée française*, *op. cit.*, p.114.
- ⁴⁵ Jean-Jacques Rousseau, *Les Rêveries du promeneur solitaire*, *op. cit.*, p.385.
- ⁴⁶ *Ibid.*, p.436.

参考文献

1. Robert Mauzi, *L'idée du bonheur dans la littérature et la pensée française*, Colin, 1979, Slatkine Reprints.
2. Michel Delon, *Le principe de délicatesse, Libertinage et mélancolie au XVIIIe siècle*, Albin Michel, 2011.
3. 井上櫻子, 「II 作品世界への招待 『新エロイーズ』 - パトスの解放を志向する『貞淑』な女性の物語-」, 『ルソーを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2010, pp.94-116.

-
4. 植田裕次編、『フランス女性の世紀 啓蒙と革命を通して見た第二の性』, 世界思想社、2008.
 5. 松本勤, 「ルソーの転期：『新エロイーズ』のクラランと『エミール』第五編における幸福な生活のイメージについて」『京都大学学術情報リポジトリ紅』 *Francia*, 1962, pp.12-28.
 6. 折方のぞみ, 「快樂と淑徳－『新エロイーズ』に関する試論」, 『人文科学論集』, 明治大学経営学部人文科学研究室, 2016, pp.15-47.

(信州大学 全学教育機構 助教)

2019年1月6日受理 2020年2月1日採録決定